

## コラム 子どもたちのあそびとまなびを引き出すプレイリード

株式会社ボーネルンド あそび場運営事業部 梅野峻

### 【はじめに】

私はボーネルンドが運営するあそび場で、プレイリーダーという仕事をしています。私たちのあそび場に来るお客様の中には、はじめての場所でなかなかあそび始められない子や、一緒にあそぶことに慣れていない親子さんなどがいらっしゃいます。そんな方に対して、あそび方を提案したり、あそびの中での子どもと大人の関わり方を提案したりするのが、プレイリーダーの仕事であり「プレイリード」と呼ばれるものです。

私がプレイリーダーとしてたくさん子どもたちに接してきた経験が、コロナ禍のご家庭での過ごし方のヒントになればと思い、私たちが子どもたちと接するとき心がけていることを紹介したいと思います。

### ■あそびと学び

ボーネルンドの考えの一つに「あそぶことは生きること」という言葉があります。この言葉は、「子どもたちにとってあそびは、食べることや眠ることと同じように、生きるうえで欠かせないもの」という考えを表した言葉です。

食事の時に食べ物を手で掴んでこねたり、スプーンでテーブルを叩いて音を鳴らしたり…。子どもたちは日常生活の様々な場面で、あそびながら過ごしています。

それらは行儀のよい行動ではないですが、子どもたちにとって、このあそびの中に「食べ物の感触を知る」「叩くと音が出ることを感じる」という学びが隠れています。子どもたちは毎日の生活の中であそび、その経験からたくさんのことを学んでいるのです。

### ■あそびを能動的な活動にする

大人が使う「あそび」には、映画鑑賞やテーマパークにお出かけするような「娯楽」の意味合いも含まれています。それは仕事や生活の余暇を使って楽しむもので、エンターテインメントであり受動的に楽しむ一過性のものです。

一方、ボーネルンドが考える子どもたちの「あそび」は、例えば、積み木を高く積み上げたり木登りをしたりする経験のことを指しています。この「あそび」は自分で興味を持って取り組み、新しくできることを獲得していく、能動的で蓄積されていくものです。自分の興味に起因しているため飽きにくく、生きることに必要な様々な力を獲得していくことが、この「あそび」の効果であると言えます。

そうは言ったものの、子どもたちの興味は移りやすく、一つのあそびに長時間取り組むことは難しいことがあります。そんなときに必要なのが、大人の声掛け「プレイリード」です。プレイリードは難しいものではなく、子どもたちがさらに意欲的に取り組んだり、もう一度興味を持ったりするための簡単なヒントやハードルを示すことです。

## ■子どもたちが考える余白を残す

子どもたちに必要な力に「問題解決能力」というものがあります。単に計算問題が解けることや漢字の読みが分かることとは違う、「問題を見つけ、解決方法を探り、解決に導く力」がこれからの子どもたちには必要とされています。いつまでも親がそばにいて子どもに降りかかる問題を解決してあげるわけにはいきませんし、問題の解決方法を教え続けることもできません。だからこそ、子どもたちには自分たちで考えて解決していく力が必要です。この力を身に着けるためには、子どものうちから自分で課題を見つけ、考え、試行錯誤をする練習が欠かせません。

例えば、積み木あそびはバランスよく積み上げていくあそびです。その中で、うまく積み上げられずに崩れる経験が、子どもたちの直面する問題です。その問題の解決には、様々な解決方法があります。土台となる部分を大きく安定する積み木に変えたり、重心を考えて積み上げたり、バランスのとりにくい細いパーツは避けたり…。解決方法は一つではありません。それらを思いついて、自分で挑戦してみることこそが試行錯誤です。

では、それに大人はどのように関わればよいのでしょうか？

「土台は大きな積み木にしよう」

「積み木の真ん中に置いたらバランスがとれるよ」

正解の導き方を知っている大人は、こんな声かけをすることが多いです。しかし、それでは子どもたちが、何が問題だったのか知るチャンスを失ってしまいます。

「土台がぐらぐらしていたよ」

「はしっこに置いたら崩れちゃったね」

こんな時、プレイリーダーは子どもが自分で解決方法を見つけられるように、ヒントを伝えるようにしています。ヒントだけではすぐに解決に至らないかもしれません。しかし、自分で答えを導き出せたときには、子どもたちが感じる達成感もひとしおです。

また、時には目の前にある課題が簡単すぎて、飽きてしまうこともあります。そんな時、プレイリーダーは新しいハードルを提案します。

「小さい積み木だけでやってみよう！」

「10秒数える間に何段積み上げられるかな？」

それまで簡単に出来ていたあそびでも、今まで以上の集中力や手先のバランス感覚が必要になり、またあそびに取り組めるようになります。

そんな経験を繰り返している中で、ヒントがなくても自分の力で課題を見つけ解決したり、自分で新しいあそびのハードルを見つけたりする力が身につけていきます。そして、あそびの中で身に着けたこれらの力は、生活に生かされる学びにもなっているのです。

### 【最後に】

忙しい毎日の生活の中の全てで、子どもたちの自主性に任せヒントだけを与えるやり方は現実的ではないかもしれません。コロナ禍で家族一緒に過ごす時間が増えている今、時間と気持ちに余裕のある時は正解を教えずに、あそびのヒントやハードルを与えるようにしてはどうでしょうか？

自分で考える余地が残っていることが、子どもたちの問題解決の練習、学びの機会になります。大人からすると少しまどろっこしく感じることもありますが、子どもたちが自分で導き出した解決方法には、大きな達成感と経験に基づいた確かな学びがあるはずで